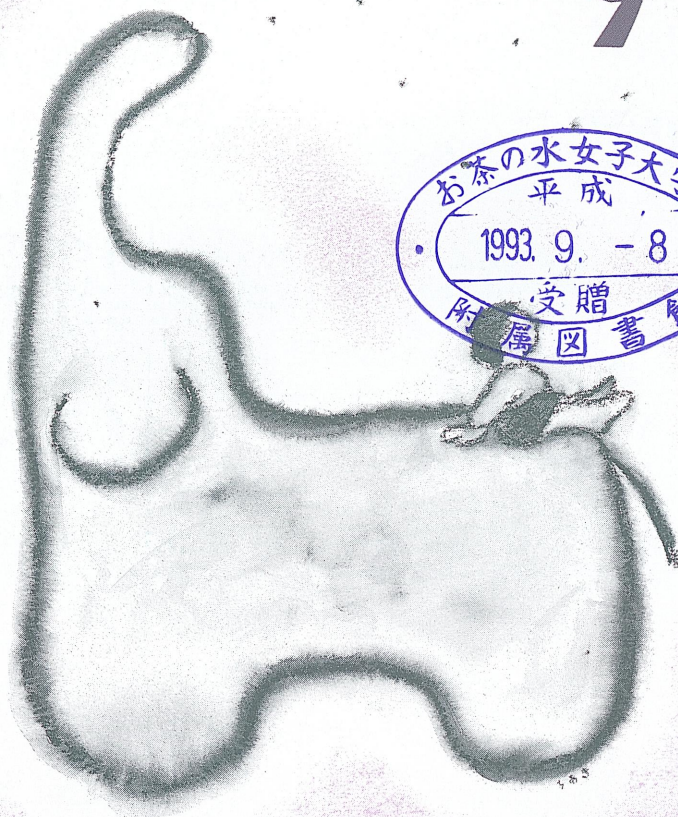


# 幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

1993 9



第92巻 第9号 日本幼稚園協会



楽しくもりつけ

# 保育給食

おいしくいただく

楽しくおいしい料理作りのために、温かい心のこもった料理の工夫をまとめた、安全で衛生的な食事を提供。



素材を100%生かした料理作りと健康な食事の取り方を中心に、おいしい料理作りのコツをまとめました。

新しいメニュー調理例、月別献立表、作り方、材料それぞれの調理ごとに一人当りの栄養価計算付き。料理作りのポイントがついていて、おいしい料理作りに役立ちます。

保育園での給食という事情を考えて、栄養価が計算されています。見やすいオールカラーページ。

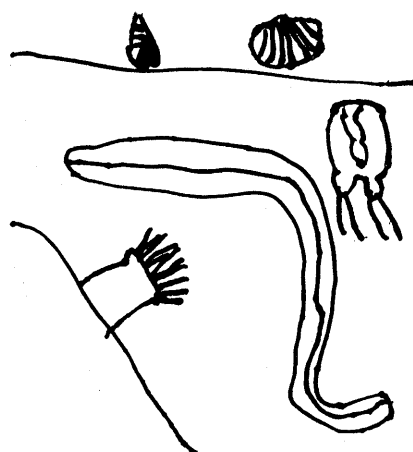
小林久子・野村迪代／著

B5判・184頁・定価3,800円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**

# 幼 児 の 教 育

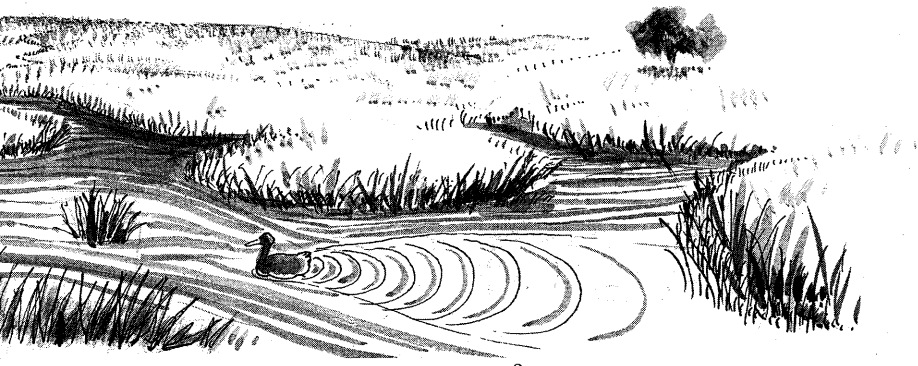


第92卷 第9号

# 幼 児 の 教 育 目 次 — 第九十二卷 第九号 —

© 1993  
 日本幼稚園協会

写真・子供讃歌……………	（4）
△巻頭言△残日録……………	日名子太郎……………（6）
輪郭ができること……………	△描画に学ぶ△……………津守 真……………（8）
「子どもの権利条約」を巡って（3）……………	守屋 光雄……………（18）
倉橋惣三「保育法」余聞（1）……………	
保護事業と倉橋惣三（一）……………	△生活の中から学ぶもの△……………土屋 とく……………（28）





保育への視座(11) 若い保育者の方々へ……………河邊 杲…(37)

堀合先生に学ぶ(6)……………上垣内伸子…(42)

Y 夫の袋づめ……………吉岡 晶子…(51)

ある日の育児日記から(33)……………佐藤 和代…(54)

公教育は家庭教育にどこまで関与するか(5)

本当の連携が始まるためには……………田代 和美…(55)

表紙・紺野 千秋／扉題字・堀合 文子  
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／田代 和美

田中三保子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子



# 子供讃歌

何をしていても　うれしいね







摄影・平野 清

## 残日録

日 名 子      太 郎

藤沢周平さんの『三屋清左衛門残日録』の放映が始まった。

「残日録」とは、「日残リテ、昏ルルニ、未ダ遠シ」の意だそうである。私も全くこの主人公と同様なので、このところ実に多くの本を読む。元々人間ががさつにできているから、これと思えば手当たり次第である。その中で出会った言葉が、習性となるので、長年携わった保育のことにどうしても結び付き勝ちなのは因果なことである。

ヘルマン・ヘッセの“Siddhartha”（シッダルタ）に「いつも私たちは途中にいるのだ。私は

途中にいるのだ。」「△求める▽とは、何か目標をもつことです。△見いだす▽とは、とらわれぬこと、懐を開くこと、目標をもたないことです。」とあった。もう数年も前から△求める▽ことは止めて、△見いだす▽ことの心境にあるような私だが、それでも次から次へと関係のある仕事が続いてくる。

これもその一つであるが、昨年の三月まで三年ほど香港の日本人幼稚園の面倒を見てきた。大学の講義の傍らであるから毎月二回出かけて合計地球を八度ほど回る旅をした。そこで遭遇したの



は、今までに体験したことのない、土地が少ないため運動場の規定がなく、毎月二回出かける公園でやっと戸外遊びをし、四季の変化が殆どなく高温多湿、子どもが眼にする文字は英字と漢字、家庭のメイドさんはフィリピンかタイの人で日本語が話せない、怪我、急病の時に行く病院では、通訳が必要等々といった中で、日本的保育をすることの苦労はまるで笑い話の連続だった。既存概念からある程度脱却できないと保育ができないという経験は貴重である。

ところで、五十七年後の西暦二〇五〇年には、地球人口が百億を越え、人口過剰で石油や食料も枯渇するのではという時代に、一体どんな子どもを育てたらよいのだろうか？

菜根譚に「看半開、酒飲微醉」とある。また徒然草の第三段には「よろずにいみじくとも、色好

まざらむ男はいとさうさうしく、玉の盃のそなき心地ぞすべき。」とあり、易経では「窮即変、変即通」という。どれがよいかは、その人次第だが、奇麗事や平均値的人間観で律することのできない時代が到来しそうな気配だが、私などを含めてその頃もう生きていない年配のものは別として、現在の乳幼児や、これから生まれてくる子どもたちにどんな保育を、教育を考えてやったらいかということは我々の使命なのではないのだろうか。まあ、そんな先のことは、自分たちで考えるさと洞が峠を決め込んでよいものか。

何か、今のわが国の保育も教育も現状の取り繕いに終始して、保身と安易さに全てを委ねているような気がしてならないのだが…。

(聖徳大学)

# 輪郭ができること

、 描画に学ぶ 、

津 守 真

幼児は、印象に残った体験や、日頃心に考  
えていることを描画に表現することを、私は  
これまでもたびたび述べてきた。そのことを  
またもやはっきりと示してくれたのは、本誌  
の昨年の五月号に記したS子である。三歳の  
S子は、妹の出生のとき、家族と共に二か月

間私の家にいた。自分の家を離れたこと、未  
知の赤ん坊が生まれることなど、身辺の急激  
な変化の不安定な時期の幼児を、私共もその  
生活に巻きこまれながら精一杯に支えた。二  
か月たってその子と家族が帰っていった後、  
私共は、その間に子どもが紙片や画用紙にか



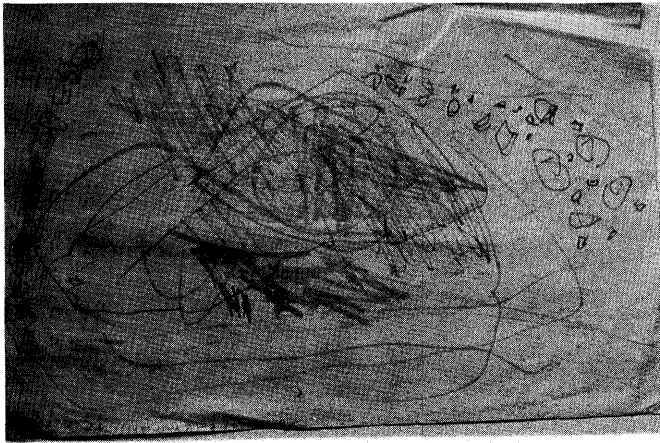
いていったものを拾い集めた。そして、それを見てはじめて気付かされたことが幾つもあった。中でも、ここに掲げる描画1を見つけたときには、あの体験が子ども自身にも記憶に残る記念すべきものだったことを知らされた。

描画1（92・1・22 三歳0か月）をみると、罫みの線の左縁に沿って、十数個の円がかき並べてあり、その上を黄色の蛍光マジックで塗ってある。一見して、明らかに、それは前晩に食卓のへりに沿って並べたワイングラスの輝きである。

そのときのことを、91巻5号から引用する。そのころS子は、一寸したことに泣きわめき、大人を困らせていた。

\*

——ある晩、夕食のあと、赤ちゃんの写真



◀  
描画1

のついた「ベビーソープ」の洗剤の箱を見つけたその子は、それを流しに全部あけて泡を作って遊んだ。ひるま母親のお腹の上にとびおりる遊びをして母親に叱られたとのこと、まだ見たことのない赤ん坊の存在に対する不安が「ベビーソープ」によって呼び起こされたのだろう。長い時間をかけて泡を作るうちに、その子は「かなしいよ」と言っていて、えんえん泣いた。

そのうちにふと戸棚の中のワイングラスが目がとまり、次々にそれをテーブルの上に並べた。私の家のワイングラスを九個全部出した。終えると、その子は、上等なコーヒー茶碗を十個全部出した。食卓のテーブルのへりに沿って丸く並べたときには、とても綺麗で、本人も私共も思わず見とれた。——（92・1

＊

それはかなりの時間をかけた作業で、父親も母親も私共も大人たちがしゅんとして見守る静寂の中で黙々としてなされた。全部終わったとき、S子はほっと一息ついて、「もうねる」と言って、明るい顔で寝にいった。いつもは、パジャマを着替えるとか着替えないとかだだをこねて、床につれてゆくのがひと仕事であるのに。翌朝も、S子は良い機嫌で起きてきた。そして、その日、どこかでの描画を描いていたのである。

よく見ると、蛍光マジックで塗られたワイングラスのほか、紙の右上には、青色の丸がいくつも描かれている。観客になって無言でその作業を支えていた大人たちである。テーブルの中央には、オレンジとピンクと青と緑の線が動いている。食卓の上に蠟燭を立てて

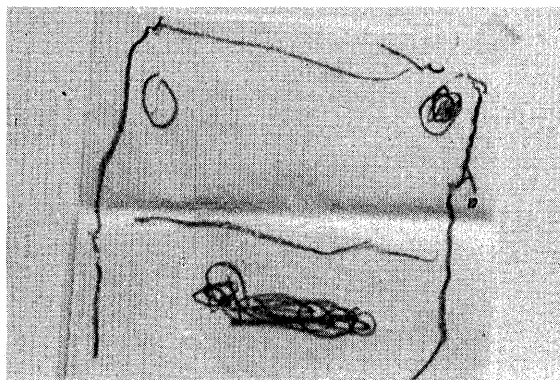


ハッピーバースデーの歌をうたった賑やかな  
明るさである。

私共に忘れがたい記憶を残したこのワイン  
グラスの遊びが、子ども自身によって描かれ  
たのは、S子にとっても記念すべき成長のス  
テップだったことを示している。

自分の家に帰った後、S子は私共の家にく  
ることは稀だったし、私共もその家を訪ねる  
ことは二月に一度くらいであった。その間に  
S子とはときどき描いたものを手紙にして送っ  
てきた。若い母親は、S子に頼まれると、ま  
めに封筒にいれて郵送してくれた。

描画2（92・6・23、三歳五か月）は、そ  
の中の一枚で「くびやってるじじちゃんのか  
お」である。じじちゃんを描くときには、か  
ならず片目を塗りつぶしたり、セロファンテ



▲ 描画2

ープを貼りつけたりする。これは、同居して  
いたある日、私が夕方家に帰ってきたとき、  
S子と「ばばちゃん」がテレビの体操をして

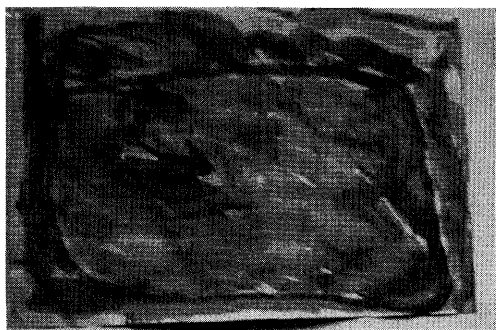
踊っていて、部屋にとびこんだ私の目に指が入って、私は眼医者にゆき、眼帯をしてもどって来たのである。そうやって過ごしていた日々の記憶が、片目の「じじちゃん」に代表されているのであろう。

描画3（93・2・11、四歳一か月）は、久しぶりに私の家に泊りがけで来て、第一目は一年前の遊びをひと通りやり、第二目の午前中に描いた連作である。午後には帰ることになっていたので、何か氣勢が上がりなかった。私はいつもと違う材料を出してみようと思ひ、絵の具と筆を出した。S子はすぐに傍に来て、太目の筆に、薄くといった絵の具をたっぷりとふくませて、ポタポタと滴をたらしながら紙に大胆につけた。紙をびしょびしに濡らしただけのように見えて、私は絵

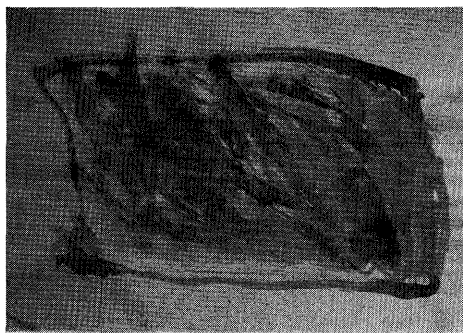
の具を出すのは早すぎたかと反省した。しかし一瞬後に、乾きかけた絵の具は淡い形を残していた。描画3(1)は、うすい輪郭の中を塗

▼ 描画3-(1)

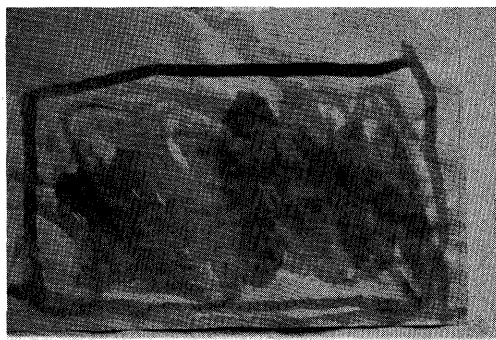




◀  
描画  
3  
|  
(2)



▶  
描画  
3  
|  
(3)

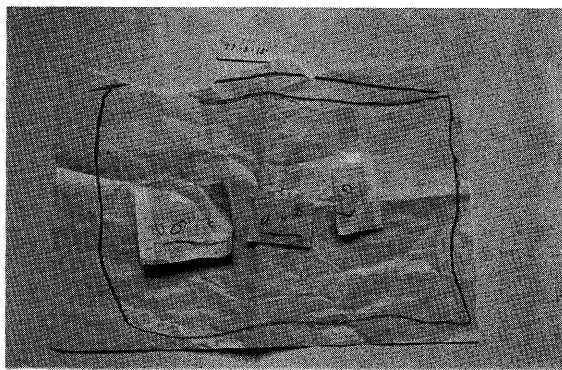


◀  
描画  
3  
|  
(4)

りつぶそうとしている。すぐ次に別の紙に描画3(2)を描いた。今度は明瞭な朱色の輪郭の中を朱色で塗り、外を緑と青で塗った。三枚目(描画3(3))は、輪郭の内側を、緑と朱で塗った。四枚目(描画3(4))は、緑色の輪郭の内を、色のまざった筆で塗り、それで終わった。最初、私は、こんなに枠を作らなくても、もっと輪郭をはみ出してダイナミックに活動したらいいのと思った。しかし、それから更に数か月を経たいま、こうして自身、自身の輪郭や限界を認識してゆくところに、この子の個性の成長があるのだと思う。この日、S子は、間もなく一泊旅行を終えて家に帰ることを承知していた。

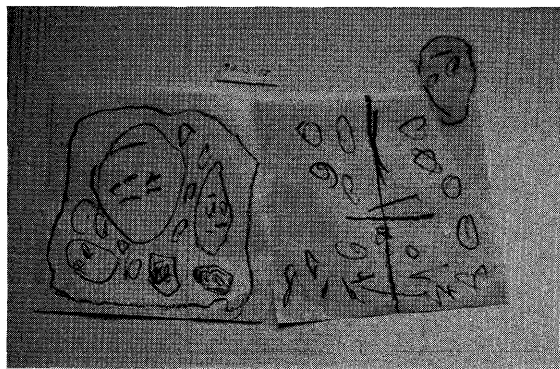
描画4 (93・3・15、四歳二か月)は、本誌の今年の7月号に記したできごとの数日前

に描かれたもので、私共の家に送られてきた。描画4(1)は、囲みの輪郭の内側に、切り抜かれた人間がセロファンテープで貼ってあ



▲ 描画4-(1)

る。描画4(2)の左側は、囲みの輪郭の中に人が何人も入っている。右側は四角い折紙の全体が輪郭になっているのだろうか。その右上



▲ 描画4-2)

方に、切り抜かれた人物がひとりだけ輪郭をはみ出してセロファンテープで貼ってある。私共は、S子が何時間も押入れの中に入り、ありたけの人形を持ち込んで何かして出てこないということを母親から電話で聞かされていた。この描画にはそのことが子ども自身によって語られているように思える。S子は四月から幼稚園にゆくことになっており、それを目前にして、知らない子どもたちや大人たちがいる未知の世界に、緊張や不安を感じているらしかった。そして、押入れの中に人形を持ちこみ、想像していろいろに動かし、新しく入ってゆく世界に対して自分自身の心構えを作っていたと言ってもよいのではないか。セロファンテープで貼ってある切り抜いた人物は、S子自身であろう。自分は囲みの枠を出たり入ったりできる自由な存在で



あるのを見ることができて嬉しい。

幼稚園に実際に通うようになって、S子は押入れの中の人形遊びを、全くしなくなつた。

ひとりの幼児が一年半の間に描いた描画から、四つの時期をとり上げ、それらがいかにか子どもの生活体験と密着しているかを見ることができたと思う。これをもう一度見直すとき、それを通して人間の成長について考えさせられる。

描画1で、子どもは、いまにもこわれそうな自分自身の精神を、落としたら微塵に割れてしまうワイングラスに移し見て、大人たちが見守る支えを感じつつ、無事に並べ終えた。次には子どもはその支えを信じて、つまり、自分の中に自らを支える力を獲得して、次の歩みを進めることができるだろう。人間

は、それぞれの時期に必要な部分を他人に支えられ、その後は自分で開拓し、成長してゆく。この子どもは、その最初の体験をしたと言ってもよいだろう。

描画2では、子どもは人の顔を描くようになったのだが、これはただ目、鼻、口を描けるようになったというだけではない。人の顔を描くようになった子どもは、抽象的な人物を描いているのではなく、特定の人を心に思い浮かべているのであることを、この描画は示している。多くの場合、子どもの描く顔は似たように見えても、ひとつひとつ異なり、それぞれ具体的な人に対する親しみや感情がこめられていると考えてよい。

描画3では、自分の輪郭と限界を発見し、しかも生命的に活動する人間の姿を思わされる。人には自分の力ではどうにもならない境

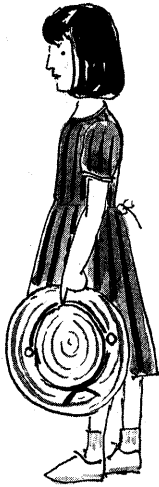
遇や運命がある。帰りたくない子どもが自分で決心してそちらに心を向けるとき、子どもは自分で自分の輪郭をつくる作業をしている。程度や種類の違いはあっても、人生の各段階で人は同じような作業をつづける。それは運命に屈従するのではなく、自分で選んで未来をつくる積極的な人間精神である。

描画4は、そのことを更に裏付ける。未だ経験したことのない課題に遭遇して、人は内面に沈潜し、迷い、予めためしなどしつつ、そのことに当面し、それを越えてゆく。それ

をするのは本質的に自由である自分自身である。考えすぎと言われるかもしれないが、描画4(2)の右上の、切り抜いて貼った人物は、子ども自身のそのような自己意識であろう。

子どもは子どもの水準で、大人は大人の水準で、本質的に共通な人生の探究をしている。子どもが描き、大人がそれを受けとり、人生の求道者としての共通の精神のはたらきをそこに読みとつても、子どもはそれをゆるしてくれるだろう。

(愛育養護学校)



# 「子どもの権利条約」を巡って(3)

守屋 光雄

「幼児の教育」編集部から「子どもの権利条約」

について、自由に私の言いたいことを書くように依

頼があり、本誌一月号に本田和子さんが、六月号に永井憲一さんが、同テーマで、夫々の立場で書かれたエッセイも読ませていただきました。

そこで、私は「御自由に」という原稿依頼文に甘えて、「子どもの権利条約」にもっと関心を」と

いう私の切なる願いを筆の赴くままに訴えたいと思

います。

「幼児の教育」の読者の皆さん!! 本年五月のゴールデンウィーク——なかでも、五月三日の「憲法記念日」、五月五日の「子どもの日」をどうお過ごしでしたか。

私たちが敗戦によってかち得た平和を希求し、戦争を放棄し、久しく奪われてきた人間平等の人權を

何よりも尊重することを柱として制定された「日本国憲法」も、いつの間にか、武器をもった自衛隊という軍隊が増強され、そうした違憲の軍隊が国際貢献の名のもとに海外に派遣されるに至っています。

もろもろの差別は温存され、言論の自由さえも脅かされています。弱者と称せられる子ども、女性、老人、障害児（者）の人権も守られていません。

世界に誇り得べき「日本国憲法」の「平和」と「人権」の太い柱は、揺らいでいます。憲法の理念に基づいてつくられた「教育基本法」も、「児童福祉法」も、そして、「児童憲章」さえも、歪められ、空文化されてきています。「憲法が危ない」「平和が危ない」「人権が危ない」このきびしい状況を私たちは、はっきり認識し、「憲法記念日」に、「子どもの日」に、語りあい、何らかの言動をおこされた方は何人おられたでしょうか。況んや「子どもの権利条約」のことなんか、思いも浮かばなかった人が多かったと思われれます。

私は、本年三月六日で、満八十歳の誕生日を迎えましたが、一九三六年京都帝国大学卒業（心理学専攻）以来、五十有余年、子ども——とくに乳幼児および障害児の心理と保（教）育に関する研究と実践と共に、護憲、反戦、平和、人権尊重の運動ひとすじに生きてきました。

敗戦後は、子どもの人権と平和を守るための運動として、私の住んでいた京都市でも、一九五二年「京都子どもを守る会」が結成され、私は初代会長に選ばれました。また「しろはと子ども会」を組織して、幼児や小学生を対象に、反戦、平和、平等を説いたり、さらに同志松田道雄（小児科医、評論家）氏らと共に、関西保育問題研究会を創立、子どもの育てられる権利と女の働く権利を両立して守るための民主的保育施設運営と増強を訴えました。

六〇年安保闘争をはじめ、母親大会、教研大会、子どもを守る文化会議などに積極的にかかり、平

和や人権を守る運動にはげんできました。

この間、一九五九年に、国際連合では、「子どもの権利宣言」が採択され、そこでは、「すべての子どもは、差別されることなく、保護され、教育を受ける、(to receive education) 権利がある」と宣言されていましたが、一九八九年、国連で、全会一致で条約として採択された「子どもの権利条約」では、「子どもは教育を受ける権利がある」のではなく、「子どもは主権者として、教育への権利(right to education)がある」と謳われ、権利の行使者としての子どもの人格が明言されています。この条項だけをとっても、「子どもの権利条約」は従来の憲章や宣言を超越した画期的な「子どもの憲法」ともいえる国際条約なのです。

しかし、憲法だ、憲章だ、宣言だ、条約だ……といわれても、現実の生活に縁遠い存在のように思っている方が少なくないでしょうが、権利の保障はほ

んとうは空気のように、普段は気づかなくても、それが汚染されたり、酸欠になったら大変なことになるのです。権利についても、むづかしいこと、子どもに権利なんて無用とさえ考える人がいます。況んや「子どもの権利条約」となると聞いたことも、読んだこともないという無関心派がたくさんいます。ここが問題なのです。

幼稚園や保育所でも、子どもこそ主権者であるという確固たる認識をもち、保育実践に取り組んでいる保育者はどの位いるでしょうか。

周知の通り、幼稚園教育要領や保育所保育指針が久し振りに大改訂されましたが、保育者の頭の切り替えは、まだまだ不十分で、改訂の条項とか、領域の問題など表面的あるいは枝葉末節的な解釈や実践に追われ、その原点となる保育哲学が確立しておらず、相変わらず、現場では、乳幼児は保護の対象とみなされ、保育者＝指導者＝権力者の既成観念は根



本的に改められず、子どもを視座においた保育がないがしろにされているのが現状です。教育要領や指針改訂の根本保育哲学は、子どもを管理、指導するのではなく、保育の主権者は子どもであり、子どものもろもろの権利を保障することが必要で、保育者は子どもにとって何が一番よいかを考えねばならないということです。それは、まさに「子どもの権利条約」の理念と一致するものです。

要するに、いくら、教育要領や保育指針の文言や「子どもの権利条約」の条文を、逐一解釈、説明してみても、子どもを差別し、その権利を無視または軽視しつづけてきた歴史や社会が変革され、子どもが「独立した権利の行使者」として認められることへの価値観、子ども観の抜本的転換がなければ、たとえ、この条約が日本で批准されても、条約の哲学は骨抜きにされ、日本国憲法のように、やがては風化し、逆行していくことは決して杞憂ではないのです。

私の保育ないし人生哲学は、「破」から「立」への、創造・逆転・止揚の論理であり、それは、また、自己変革、集団変革、社会変革の論理でもあります。



「子どもの権利条約」が、権利施行が可能になるよう国内法も改訂整備したうえで、世界各国で批准され、真に、子どもが「独立した権利の行使者」という人格として認められるためには、既存の価値観の転換、止揚こそが必要であります。そのような意識変革がなければ、子どもの権利を守りつづけることは困難です。

「子どもの権利条約」が敬遠される理由の一つには、権利条約にしても、法律用語というものは、大人でも読みにくく、理解の困難な表現が多いことにもあります。

そこで私は、子ども語訳、ユニセフ版の絵本『子どものけんり』（佐学社）をおすすめします。この本は、内外の画家が「子どもの権利条約」の大事な条文の中身を描いていますし、他の主な条文についても、子どものことばで表現されています。大人も子どもも、とっつきやすく、絵をみるだけでも、条

文の意味するところが、ある程度理解できます。文もわかりやすい子どものことばで書かれていますから、親子でも、保育者と子どもとともに、一緒に絵を見たり、文を読んだりすれば、「子どもの権利条約」の理念や条文についても理解しあえます。

たとえば、

「みんな平等なんだ」（第二条）（日本人も、外国人も、男も女も、はだの黒い人も白い人も、みんなひとりの人間なのだ、いじわるや差別してはいけません）

「子どもにいちばんいいことをして」（第三条）

（おなかをすかせている子、病氣なのに病院にいけない子、戦争でころされる子どもも、いっぱいいるよ、おとなのつごうで子どもをいじめないで）

「こどもだって、じぶんのことをしるけんりがある」（第七条）（どこの国の子なのか、お父さんお母さんはだれなのか、わからなかったらこまっちゃまうよ。じぶんの名前、じぶんの国、じぶんの親を

しりたい、人間だもん

「こどもだって、じぶんのかんがえをいうけんりがある」(第十二条) (わたしたちのいけんをちゃんと書いてね)

「こどもだって、じぶんできめるけんりがある」

(第十四条) (じぶんでかんがえたり、いいわるいをきめたり、宗教もえらんたりできるよ)

「こどもは健康にいきる権利がある」(第二十七条) (病気になったら、いちばんいい手当てをして、赤ちゃんや小さい子が死なないようにしなくちゃいけない。そのためにも、地球をよこさないで)

「病気や障害があっても、こどものけんりはおなじだよ」(第二十三条) (人間だもん、差別しないでね)

「こどもには、べんきょうをするけんりがある」(第二十八条) (小・中学校には、みんな、ただでかよえる。先生は、こどものところやからだをきず

つけるようなしかりかたをしてはいけない)

「こどもには、あそぶけんりがある」(第三十一条)

「こどもを戦争にまきこまないで」(第三十八条)

(戦争でけがしたり、ころされるのは、こどもなんだ)

「こどもは、こきつかわれたり、あぶないしごとをさせられたりしない」(第三十二条) (こころやか

らだをきずつけるしごとは、しなくてもいいんだよ)

「いろいろなほうほうで、じぶんらしさをあらわすけんりがある」(第十三条) (じゆうにはなした

り、字をかいいたり、絵をかいいたり、いろんなことをして、じぶんのきもちをあらわせるんだよ)

「やくそくをまもって」(第四条) (「子どもの権

利条約」というやくそくをした国の政府は、やくそく、がちゃんとまもられるように、法律をかえたり、しごとのやりかたをかえたり、できることはなんで

もしなければいけない)

など条約の中でも大事な条文について、子どものことばで述べられています。

ユニセフ親善大使として、アフリカやアジアを訪れた黒柳徹子さんが、この本の序文の中で述べているように、「……世界のすべての子どもが、みんな、のびのびと自由に成長していけるように、大人も子どもも、みんな条約の中身をよく理解し、協力し合って子どもの権利を守っていく、それが、この条約の理想です。……だれだって、はじめは子どもなんですから」ですし、名取弘文さんが、あとがきで指摘しているように、「……日本や世界の現実には、憲法や『子どもの権利条約』に書かれた理想とはずいぶんかけはなれている。だからこそ、すこしでも理想に近づけるために、子どもだって、じぶんの考えをいわなくてはいけないし、大人も子どもにも、このやくそくをおしえなくてはいけない……」と私も痛感します。

私が属している日本保育学会でも、学会として、または会員ひとりひとりが意識して、「子どもの憲法」ともいうべき「子どもの権利条約」について、



保育研究や実践の中で、積極的に関心をもって取り組むことの必要性を、私はかねてから提唱してきました。

漸く、日本保育学会第四十六回大会（福岡教育大学）の自主シンポジウムにおいて、（一九九三年五月十六日）「子どもの基本的人権を守る生活の創造を―子どもの権利条約の理念に即して―」というテーマで、企画者安部富士男（日本体育大学女子短期大学）、司会者北原歌子（和泉短期大学）、シンポジスト新沢誠治（神愛保育園）、村山祐一（保育研究所）、安部富士男（安部幼稚園）、指定討論者黒田瑛（白梅短期大学）のメンバーで子どもの人権を守る立場から、「子どもの権利条約」について討論の場がもたれたことは、おそきに失する感もないではありませんが、非常に有意義でした。

企画者の安部富士男さんの企画要旨によりますと、「子どもの権利条約」は、既に一九八九年、国連で、全会一致で採択され、世界の多くの国々が批

准しているのに、日本はまだ批准していません（一九九三年五月現在）その間にも、学校、幼稚園、保育所、家庭、地域における子どもの権利侵害は増えつづけています。このきびしい状況の中で、日本も「子どもの権利条約」を批准し、その思想を、行政、福祉、教育を含め、子どもの生活の中に具現化することが緊急の課題になっています。日本保育学会でも、会員の一人ひとりが「子どもの権利条約」を視野において、それぞれの実践と研究をすすめていくことが大切であると考えて、表記のテーマで自主シンポジウムを企画したということです。

このシンポジウムに私も参加しましたが、残念ながら、参加者が少なく、まだまだ学会員一人ひとりが、「子どもの人権問題」についての関心の薄いことを知りました。

しかし、この自主シンポジウムに出席したメンバーは、夫々の立場で、積極的に発言していました。シンポジストを含めて、参加者たちから出たコメ

ント、提言、討論は必ずしも統一的なものではありませんでしたが、次のような問題が話題になりました。

日本の批准がおくれている理由は、昨年末のPKO法案強行採決での国会大波瀾、引きつづく金丸事件などで汚濁と腐敗にみちた政界、政治改革、不景気対策などに追われる政情の中で、「子どもの権利条約」の審議などは棚上げにされました。

やっと本国会で審議がはじまりましたが、政府訳の「児童権利条約」に対し、「子ども権利条約」と呼ぶべきだとする意見の対立、又条約に沿って「非嫡出子」を差別する民法の改正や、「子どもの意見表明権や自己決定権」などを保障するための国内法の改訂を拒否する政府の見解に反対する考えなどの対立が解決されません。批准されずにいます。このままでは、「子どもの権利条約」の理念は骨抜きになり、絵にかいた餅になってしまいます。画期的児童観の変革を要求される「子どもの権利条約」の

一刻もはやい批准は望ましいのですが、その根本哲学が失われるようであってはなりません。そのため、のねばり強い論議が必要です。

学校、幼稚園、保育所、地域社会におけるさまざまな権利侵害や差別の実態が訴えられました。たとえば

- ・ 障害児（者）の選別、排除、疎外による差別
- ・ 被虐待児の増加、相談事例
- ・ 幼児を含めての体罰
- ・ 「保育に欠けるとは」の問い直し
- ・ 生きること、命の大切さの認識
- ・ 育児休業法―権利意識の確立
- ・ 乳児の叫喚 幼児の反抗…も自己表現としての権利を認める

- ・ 保育所、幼稚園などでの子どもの発達権の保障―保育者の増員等現体制の変革
- ・ 保育者養成校での「子どもの権利条約」の学習の必要性



・政府、自治体へ「子どもの権利条約」の条文を守れるように訴えること

これらの問題解決のために、育児相談、母親講座開催、家庭訪問、子育てコーナーの開設……をはじめいくつかの実践例の報告もありました。

今回かぎりではなく、今後も学会だけではなく、各地区でも、こんな集まりをもてるとよいと思いました。

日本でも「子どもの憲法」である「子どもの権利条約」が、その理想に少しでも接近する方向と内容で批准され、子どもが「独立した権利の行使者」として認められるためへの既存の価値観、子ども観の転換が求められます。

(日本保育学会常任理事)



# 倉橋惣三「保育法」余聞 (1)

さきに公開した保育法講義録のうち、重要な内容を含みながらも授業の流れの中での短い言語表現にとどまり、真意が読むものに達しないのではないかと思われる部分がある。

それらの幾つかについて、関連ある資料及び若干の補足的説明を加えることによって「保育法」理解のいささかの助けになることを願い、この作業をすすめる。

土屋 とく

## 保護事業と倉橋惣三 (一)

生活の中から学ぶもの

保育法の第一章は、大正十五年幼稚園教育に關し

て、我が国で初めて独立に公布された法令である

「幼稚園令」を示すことからはじまっている。

この講義は主に幼稚園教員を目指す保育実習科の学生に対してなされたものであった為、その内容は幼稚園を中心にしたみ述べられているようにみえる。

しかし倉橋先生の意識の中には、幼稚園と保育園は同じ年齢層の子どもにとって等しく就学前教育の重要な「機会」と「場」であり、保育の心を伝え、よき保育者養成をはかることに於いて何ら異なる筈のないものであった。

むしろ自身が附属幼稚園の主事の立場にありながら、学生と教師だけの密室ともいえる教室内で、「このお茶の水の幼稚園の幼稚園などは自己活動の研究としては世界一であるが、実に例外的なもので、社会的には容れられぬ高級さである。」との箇所は穩健な先生としてはかなり激しい発言であり、いつわらない心情の吐露とみてよいのではないかと

思われる。

——六一頁——

### 保育園てこそ

本文中、ナースリースクールや託児所について詳細に説明を加え、社会的乳幼児保護について学生の理解を深めるように努めているところが多い。

特に第一章第二節の幼児教育の歴史のうちフレーベルを語る中に、当時の日本における幼稚園と託児所の異なりを、文部省と内務省（外務省に対して国内の行政をつかさどる戦前の中央官庁。地方行政・警察・土木・衛生・社寺・出版等国民生活全般に關与、厚生省が出来るまで保護事業を監督）の管轄面での違いとしたうえで、更に「幼稚園が教育的見地から発達せるものに対し、託児所は社会的（生活的・保護的）見地より発達せるもの」と一応説明しながらも、

『……歴史的發達は、託児所と幼稚園とをあまりにへだててしまった。

託児所は直接 衣・食・住の問題から設けられたものであったが、人間的なものの教育的なものだつて仕込む。託児所の子どもに自己活動はなく、幼稚園の子どもには自己活動があるということは考えられない。また幼稚園という名前上子どもらの生活を省みてやらないということは考えられない。』と対象は幼児という同じ子どもでありながら、当時の一般的偏見について言及したあと、更に

『本当の幼稚園は今の託児所の如くやらねばならぬ。託児所では教育せず、幼稚園では生活の干渉をしなくてよい。こんな問題は有り得ない。この二つを考えてみても結局通じるものは子どもだけを考へられるのである。』

真の幼児教育は託児所でやって初めて出来る。実に託児所の保母こそは情の通じるものである。』と語っている。

—— 抜粋 ——

このような発言は昭和六年の「幼児の教育」第三十一巻第六号〈託児所保育座談会〉の記録の中に同じような言葉として残されている。

『……日本幼稚園協会は、幼稚園という名を用いておりますが初めから幼児教育全体の会のつもりで、当然託児所保育も含有しておりますが、そちらの話を十分承れる機会がなかったのであります。……』

と倉橋先生の口きりで始まるこの座談会では、託児所の経営と運営について (一) 保育時間 (二)

当直を含む勤務時間と疲労 (三) 経費と経営

(四) 保育者の確保 (五) 幼稚園との関係

(六) 給食・おやつ・保育料 (七) ケーヤーの内情

(八) 保育者養成問題 等々二十四頁にわたつて各種の実情や悩みが忌憚なく話し合われている。

また託児所の特徴として、保育時間や内容共に「向こう本位」。つまり預ける親・預けられる子どもの事情や背景によつて、「こちら側」託児所は多様に対応することが常に要求され、それに応え

ていくことが使命であることが託児所側の人々から強く発言されている。これを受けて

倉橋『時間が長いだけでも容易ではありません。

時間の長短が幼稚園と託児所の外から見てもわかる違いではありますが、それと並んで託児所においては所謂身のまわりの一切の世話——私は実際上の「ケヤー」と名付けておりますが——をなさいますが幼稚園ではその「ケヤー」は家庭でやるものだから、所謂教育というものが主になっております。

そこで託児所の人々が我々に「ケヤーに忙しくて教育が出来ぬ」とおっしゃいます。ところが我々の考えでは幼稚園でも小さい子どもの心だけを扱うことが実に抽象的で、心だけでなくケヤーに触れていかぬ限りその子の実体に触れていけません。といって家で顔を洗ってきておりますのもう一度洗い直す必要はありません。一時に帰る子どもにおやつを自慢らしくやるのも変です。しかしながら本当の生活の世話までしなければ本当の教育は出来ぬと心ある保

母は皆感じております。

その点では、逆に皆さんこそ本当の教育が出来る  
と申したい。……』続いて

倉橋『幼稚園も託児所も一つになるべきという理論を社会で接近させておりますが』という発言に対する保育現場からの否定的反論に対しては『近寄るということは概念的に近づきつつあるのです。幼稚園の名において今とは違ったことをする時代が、将来くると思います。しかし裕福な子どもを受け取ったときには、それはそれとしての仕事がありすぎるほどあるのです。が、ケヤーをしますと親らしい気持ちになりますので、我々幼稚園の者は垣根のぞきにくく、やさしい気がします。』……只今到達しております問題は、幼稚園こそ真に充分の保育が出来難い。母らしい託児所の保育に比べると、まだ先生教育になっている。と考えるのです。——おやつをやりながらの教育——髪を洗いながらの教育——……』

これらの記録を見たとき、この時代に（昭和初

年）おける幼児教育や一般的な意識の実態が浮び上がるとともに、終始“母の心” “子どもだけを” “本当の保育とは” を考えていた倉橋先生の姿が重なるようになってくる。

この座談会の出席者は

東京市社会局児童掛長（係）

広瀬 興

東京府廳社会事業協会主事

岡 弘毅

東京府廳社会課

朝原 梅一

浅草區玉姫町市民館託児所主任

北井ますゑ

本所區江東橋市民館託児所主任

寺田ふじの

小石川區日暮里桜楓会託児所主任

丸山 ちよ

四谷區二葉保育園主任

徳永 恕

浅草區同情園主任

坂巻 顯三

等公・私立の代表者たちであり、そしてこの席には女高師附属幼稚園から教員全員が同席し、内容を聞き取るとともに記録の任に当たっていた。

## ケアーの実情

近代の託児所の歴史は明治時代に遡るが、野口ゆか・森島みねが華族女学校（現在の学習院）付属幼稚園の職にありながら、貧しい子どものために四谷に創設した二葉幼稚園Ⅱ二葉保育園Ⅱが東京の慈善事業としての先駆けであり、その後設立されてくる





託児所のモデルとして社会的に大きな貢献と影響を与えていた。

昭和期に入り社会事業に対する関心のたかまりに連動して託児施設は急激な増加をみせ、公立の託児施設も建設整備されてくるが、それでも社会的弱者にたいして手をさしのべ力をつくす事は篤志家にかぎられ、各種の困難をかかえながら保育に当たる者の愛と献身に負うところが多かった。

特に世界的な経済大不況にさらされたこの時代、貧富の差は非常に大きく、また非衛生的な環境からくる乳幼児死亡率の高さ、貧しいがゆえの生活の乱れ、疾病等、現代では考えられないようなひどい実態がそこにはあり、社会不安と生活の窮乏にあえぐ家庭の救済も託児所の役目であった。同時期に東京市社会局から出された「託児場の葉」(市の託児施設の最初の名称)には、保育の内容として次の具体的目標があげられている。

1. 彼らを先ず清潔にすること。衣服・毛髪・爪

・虱の除去・傷の手当て等。

2. 栄養食、おやつが与えられる。

3. 食事の作法、規則正しい習慣。

4. 自由に快く遊ばせるとともに、一面においては遊戯、その他の間に規則的な習慣を養い、

服従の徳も養成する。

子どもと終日生活を共にする託児所の保母は、子どもの心を一番よく知り得る立場にあるとはいえ、現実にはケアーそのものに大半のエネルギーをとられてしまい、教育そのものに手がまわらないという現場からの嘆きが洩らされていたのも事実であろう。

出席者の中に徳永恕、丸山ちよの名を見出すが、日本女子大の同窓会によって創立された桜楓会巣鴨・日暮里の両託児所は、設立当初から主任としての彼女によって長年支えられてきたものである。丸山は大正末にも「幼児の教育」に〈託児所の実際〉〈子供等を日光に浴させよ〉という題で、託児所周辺の生活実態を詳細に報告するとともに、乳幼児保

護事業の急務と社会的関心の高まりを期待する論説を載せている。

保育座談会がもたれた翌年の「幼児の教育」誌上には〈貧しき幼児達の為に〉と題して『幼稚園と託児所の各保育者が、話し合う機会を多く持てるように期待する。……私共の毎日取り扱っております乳幼児のおおくは、今、生活線よりずっと下に即ち欠食児級にあるもので、その生活をゆだねる父は働きたくても仕事が無いのです。打ち続く不景気はとりわけ細民地区にある人々の上には、来る日も来る日も悲惨なものとなっております。……この問題の重要なことを思うにつけ今は皆様に訴え、殊に幼児教育に任せられる方々の御助力を願いたいと思います。』と綴っている。

次年度の「幼児の教育」には出席者の朝原梅一が〈勤労家庭の幼児の教育〉として行政側から稿を寄せ、託児所保育における七項目の留意事項を挙げている。

公立の託児所は私立にくらべ幾分諸条件に恵まれていたが、浅草の玉姫託児所の北井ますもも続いて次年度の「幼児の教育」誌上で、〈母に代わりて〉と当時の子どもの達の生活と保育の現状を報告している。

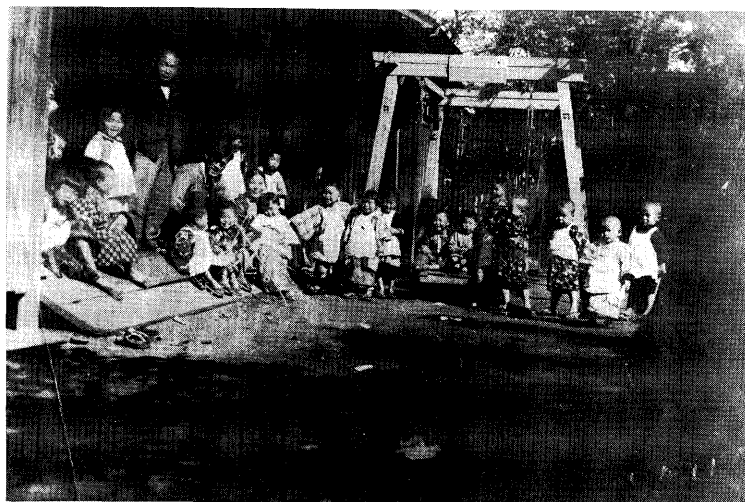
——第三十二・三十三巻——

ありのままを

この時期に在学した保育実習科の学生は、教育実習の観察・参加段階で託児施設を訪れ、つぶさに保育活動と周辺の社会の実情を体験してきたという。『私達二十四名は先方の御迷惑を考慮して、二葉保育園と日暮里の桜楓会託児所との二班に分かれ見学に行きました。引率して下さったのは菊池ふじの先生でした。

粗末な木造平屋建ての園舎での保育を見せていただき、そのあと丸山先生の先導でスラム街を歩きまわした。そこには初めて見る貧しい人々の暮らしがあ

◀ 桜楓会日暮里託児所風景（武居愛子氏提供）



り強烈な驚きの連続でした。道々、傾いた狭く暗い家の奥から丸山先生にたいして感謝のまなざしで頭を下げる人もおり、神様のように慕われていた様子が今も目に残っています。

再び託児所に戻ってのお話の中で、「一旦こうした生活をした人は生活向上への意欲を失い、なかなか上がれなくなってしまう」等、実態を細かく伺いました。小柄でこの時も体調を崩していらした丸山先生の何処にこうした愛と献身の力があるのかと思ったことでした。』

―八坂富子氏談 昭和七年卒業生―（文責 土屋）

こうした機会を積極的に計った倉橋先生の意図は、保育者としての育ちが附属幼稚園だけでは足りないことを痛感し、託児所の実態をありのままに知ること。そして保育の多様性とその心を、体験を通じて真に理解させようとするものであったと考えられよう。

二葉保育園・桜楓会託児所への見学はその後も戦

争が激化してくるまで継続して実施された。しかしこの体験学習はそれ以前に在学した学生には課されておらず、実習は附属幼稚園に限られていたという。

——清水光子氏談——

倉橋先生は社会的児童保護に早くから関心を示し、上記の具体的動きに先立つ数年前より「児童保護」及び「児童保護の教育原理」「社会事業家の養成機関」等の論文を発表している。しかし保育法の講義がなされた時期との重なりの中で、「幼児の教育」の記事の集中や実習の開始がなされているのは、単に時代的な背景との関係というだけでなく、同じ幼児教育の別の姿を見ることによって、保育者としての意識の変革と覚醒が生まれることをのぞんだものであるに違いない。

保育科卒業生の多くは全国の各幼稚園に就職したが、保育所を自ら進んで選ぶものもいた。捨て子・遺児・迷子など当時最も悲惨な子ども達の乳幼児保護施設であった東京市養育院保育に倉橋先生の紹介

で赴任した人もおり、これらのことからしても授業の中で繰り返し説かれていた児童保護と幼稚園教育の融合を願う心が生かされた証左とみてよいのではなからうか。

因みに、先生は子どもの実態に触れることによって育ての心を知ることを、戦争が終末に近づいていた昭和十九年に試みてもいた。さきに記した丸山は桜楓会託児所の主任を退いた後、その長年の功績から巣鴨の第一託児所を譲られ西窓学園として個人で事業を継続していたが、空襲にともない疎開に踏み切る。

倉橋先生は文部省を動かし、この建物を女高師学生の子乳児保育の実習場として買い取り、斉藤文雄愛育病院長と共にいろいろと整備し、漸く二十年度から実現に至るところまで漕ぎつけた。しかし四月十三日夜半豊島区全域の七割を焼き尽くした空襲によってこの計画は総て灰塵に帰した。——つづく——

# 保育への視座 (11)

## 若い保育者の方々へ――

河邊 杲

ある日久しぶりに四歳になったばかりの孫（男児）と遊ぶ機会があった。彼の母親が私に「お茶はいかが」と言ってくれたので「ありがとう、じゃいだろうか」と言って食卓の上に用意してもらったお茶をいただく。すると、孫も「ぼくはジュース」と言って食卓の私の真向かいに腰をかけて座った。

彼には丸い把手のついたコップにジュースが用意された。すると彼は何を思ったのか食卓のところから少し手をのばすと、届く距離にある本箱の書籍が立てである棚のところにコップを置いた。どうするのを見ていると

腰掛けた位置から動かず、そのままで手をのばしては、そのコップをとってジュースを飲むようにしている。その姿をみた母親は、「そのような本箱のせいまいところに置いて飲まないで。広い食卓の上に置いて飲もうね」とやさしく指示をしたが、ただ黙々と手をのばしてはコップをとってジュースを飲んでいく。

「おとすかも知れないよ。おとすと全部こぼれてなくなってしまうよ」と言葉かけが続くが、聞いているのか聞こうとしないのか指示通りに食卓の上にコップを置こうとはしない。「こぼれたらその本が濡れてお父さん

やお母さんも困るから、はやく机の上に置いて飲みなさい」と少し命令口調になる。

私もすぐ孫と真向かいに座っていてその親子のやりとりの様子を見聞きしながら、母親のことばに抵抗しているようにもまた困惑しているようにもみえる彼の行動をなんとか援助しなければと思いながらも、事実は第三者的、傍観的な姿勢になっていたが、何時の間にか、母親の立場をどう援助すればよいかに ついても微妙に心が動いていたようにもおぼえている。しかし結局は「手をのばしてとるの、とりにくいでしょう。近くに置けば飲み易いよ」と、どっちともとれないことばを投げかけるのが精一杯であった。結果は「そんなこととくに見通しているよ」と言わんばかりの顔つきで、手をのばしてコップをとり飲むことを続ける。

その直後、腰かけから降りて動いたので、

新しい動きを期待しながら少し目を離した。そして彼がまた席にもどったので、コップの方を見ると二つ折りにしたティッシュペーパーの上にコップが置いてある。

私は瞬間「ははあーん」と息をのみ込んだ。彼は考えたなと思った。こぼれたら困ると言われたのを聞いて、恐らくそのコップの下にティッシュペーパーでも敷けばと考えたのであろう。彼なりの生活の知を働かせたのである。(このティッシュペーパーへの思いつきにはきつと何時か過去になにかがこぼれてティッシュでふきとっているのをみたとか、下に敷いてももらった体験を思い出したのであろうと思う) 母親や私たちの話を聞こうとしない、抵抗しているようにも見えていたが、指示されている問題点は聴いていたのだった。ただ聴くだけでなく、彼自身なりの対処のし方を考え、見つけ、考えもして自分のもって

いる知識や技術をフルに働かせて、これを行  
動に移している。その行動は大人の指示内  
容、指導の中身からすれば、その場つくりの  
ようなちょっとしたつまらぬ活動のように  
見えるが、最悪の状態や問題点に対して精一  
杯の対処のし方を発見し現実化したことはす  
ばらしいことである。

こうした場合大人たちが「このようにある  
べきだ」「このようにするのが最善である」  
と考えてそのように子どもにわからせて動か  
せようとすればする程、大人の方にイライラ  
がつのるばかりか、子どものささやかながら  
の発見や工夫や現実化の今、そこにおこつて  
いる動きが見えてこなくなることが如何にも  
悲しいことではなからうか。

相手の子どもも悲しいに違いない。これが  
わかってもらえて認めてもらえればそれがう  
れしいのである。

同じ行為を続けているのを見てさらに「こ  
ぼして、なくなっても、もうジュースはあげ  
ないわよ」という母親のことばから、子ども  
の新しい動きにも気づいていないことや、そ  
れを認め子どものその瞬間の心にふれようと  
していないことは明らかである。

そして気づいてもそのことを言葉にできな  
かった私自身に対しても彼はうれしくはな  
かったであろうことは間違いない。子どもに  
とってうれしい存在となるためには、その時  
その場の瞬間の心にふれてもらえた時ではな  
かろうかと思う。

そして、教えようとすることも、このうれ  
しい関係が成立してこそ、素直にうけ入れも  
するのである。

この私自身、気づいた子どもの心の動きを  
言葉にしてふれられていたら、きっと私と彼  
との関係はもちろん、ひいては一生懸命指示

命令して教える育てようとしていた母親との関係もうれしい関係に変わっていったであろうことを察するに余りがある。

そこでこのことに関連して是非考えてほしいことがある。

それは、近年、幼児理解ということに関して「受け容れる（受容する）」ということばが盛んに使われ、その課題の中で、子どもの行為を認めその心持ちを受け容れなくてはならぬことはわかるが、「幼児の行為をすべて受け容れるだけでよいのだろうか」という疑問が話されることに会うことが多い。その疑問で問われていることの背景がよく理解できる。疑問を出される先生が何言いたいかが見通せるからである。

その時、「受け入れることをやってもられたことがありますか」とたずねると、殆んど答えが返って来ない。実践してみても幼児を受

け入れるとどうなるのか。そして自分（保育者）の実践は本当に「受け容れた」ことになるのかを確認してほしいと話して来ている。

今、保育が前進しないのは、このようににとばかりが先行して、実践しながら考える姿勢が弱いからではないかと思う。観念的・概念的になり過ぎてはいないだろうかと思う。なおその受け容れられた子どももその受け容れの過程や結果がひとりひとり異なるはずである。実践の一つ一つの積み重ねの中で一般化されていくことが少なく、抽象的になってしまっている。まず保育者ひとりひとりが考える「受け容れ」をやってみて、その事実で考えてみてほしいと思う。

いまひとつは「叱らなければならぬ時は叱るべきでは……」ということが簡単に受け取られてしまっているように思われてならな



い。

今回前述したような指導をしようとしている保育者とその困ったことをしている子どもとの関係は勿論のこと、保育者が日常生活の中で子どもとどのようにかわっているのか、心にふれようと努められて来ているのかどうかによってもそのことは随分違って来ることについてたしかめられていないように思う。指導したり方向づけたり、コントロールできないで困っていることへの援助をしたりする内容とかそのタイミングのことのみで終わって、その関係のあり方が余り深く問題になっていない。やはりここにも具体的な実践的研修に欠けているのではと思われる。「こういう場合には」「こんなことをしたときは」と幼児の価値判断が必要と考えたり価値志向の要求が起こった時に、特にこのような点について探求してほしいと思う。

保育の實際を参観し、保育の現場に臨むときそしてこの保育における人間関係の中心にふれるとき、そこに起こっているひとりひとりの子どもの瞬間、瞬間の心の動きにどのように触れているだろうか、そしてその時その場の心の動きに相応する親しみのあるうれしい関係の場に出会えたとききつと感激をおぼえることができると思う。

保育について迷いが出て来たり疑問がわいて来たら、まず、きょう一日をふりかえって、保育者が子どもにとってうれしい人になっているか。子どものその時その場の心もちに引きつけられたことは何だったかを確かめてみてほしいと思う。例えばそれがどんなにやさやかなことであつても。

(元・洗足学園短期大学)

## 堀合先生に学ぶ(6)

信頼関係を基盤にして、一人ひとりへの

対応が始まる　　、九月の保育観察から、

上垣内　　伸子

今日の保育が終わった後、堀合先生は、どことなく

楽しげな様子である。これまであまり関わりのな

かった子どもたちが先生に近づいてきてくれたこと

が、何にも増してうれしいとのことだった。まず保育

者との信頼関係を作ること大切にとは、堀合先生が

常日頃から言われ、一学期の保育の中で大切にされて

いたことである。保育後の話し合いでは、子どもとつ

ながること、その次にくる子どもへの対応が話題に上

がった。

◇はるちゃんが変わった

上垣内（以下K）今日、二期期になって初めて観察さ

せていただいたのですが、幼稚園全体の雰囲気は落

ちついているなと感じました。

堀合（以下H）そうですね。落ちついてきましたね。

立川（以下T）しょうじさんやはるちゃんの変化は大

きいですね。また、子どもたちそれぞれが、自己活動を始めてきたようにも見えました。

K はるちゃんは、先生をととても意識していますね。

H そうですね。ですから、はるちゃんが見た時、こっちへ呼んであげると今学期は来てくれるんです。

K 先生の動きを見て行動することが、今日は多かったようです。また、表情もこれまでよりもずいぶん和らいで、観察している私の方へも、ときどき見ては笑いかけてくれました。

T 先生は今、はるちゃんにとてもやさしいですね。お母さんよりも親切じゃないかと思うくらい。

園庭から戻ってくると、丁寧に上履きをはかせてもらったりして。あそこまで真心を込めて接してもらうと、はるちゃんは、先生のあたたかさを感じとるのですね。

K 先生との距離が近くなり、自分が描いたお面を



先生との距離が近くなる

切ってもらう時も、後ろにくっついて、伸び上がるようにして先生の手元を見ながら待っていました。

T はるちゃん、「あそこまで先生との関係が出来る」と驚きました。

H あの人は、ものすごく警戒心のようなものがあつた人です。それに対して、他の人と同じようにぶつかっていたらなおさら向こうを向いてしまうと思うたので、一学期はいろいろとやってあげることが多くありました。つながりがつかないと、次が始まらないものですから。

T いろいろやってあげたとおっしゃいましたが、今日あたり見ていると、はるちゃんの苦手なところは十分にケアしているけど、得意なところは彼にまかせている……そこが一番感心するところです。

下手すると、はるちゃんを助けなければと、全てやってあげることになる。つながりを持たなくてはと思うと、子どもにまかせる部分がなくなる……。

それが、先生の場合、遊べるような時は見守って、

苦手なところで助けるから、はるちゃんにとってはありがたいのですね。

帰りの集まりの時も、ここははるちゃんの席というのをとっておかれていましたね。

#### ◇ かずきくんが来てくれた

H もう一人、かずきくんも、一学期にはあまり来なかったのに、二学期には来てくれるようになり、今日も、そばで、ウルトラマンのお面を作っていました。

T 先生の方を向いているということは、発展とか進歩につながるのではないかと思います。

H 初めの頃、あちこちへ飛び出して行って遊んでいたの、見守ることしか出来ませんでした。

K そんな子どもたちが、戻ってきたときが大事ですね。遊んでいるからと見逃すと、つながるチャンス

がなくなってしまう……。

T それが、例えばお面作りを手伝うこと等で子ども  
の気持ちをつなげていく意味ですね。保育内容とし  
てのお面作りで何を育てるというのではなく、つな  
がっていく一つの具体的な手段なんですね。

H 活動の内容の意味まで伝えようとしても、今はま  
だ判らないのではないかと思います。とにかく、一  
人ひとりの子どもとつながり、信頼関係を作ること  
を心がけてきました。そして、これからがそろそ  
ろ、いわゆる教育を考える時になると思います。

まず、信頼関係を大切にして、その次のところとし  
て、一人ひとりの思いや育ちに応じた対応があるの  
です。ですから、その子その子の人となりを理解す  
ることも、初めの頃の大事な部分です。

◇先生に向かってきた気持ちを大切に受けとめ  
る

T 今日、けがした子がいましたね。

H ゆいちゃんですね。あんな小さなけがでも言って  
来てくれるのは、とてもうれしいことでした。これ  
まで、好きなことを好きなところでしている子でし  
たのに。

T 入園当初はよく見かけた光景でしたが、今時珍し  
いですね。あんな小さな傷を丁寧に手当するのは、  
ゆいちゃんが来てくれてうれしいという、そこから  
出発しているんですね。

H あのゆいちゃんが来てくれたのだからうれしいん  
です。あの気持ち、あだやおろそかには出来ないで  
すよ。

K あの時、はるちゃんが後ろですっと見ていました  
ね。

T はるちゃんが、ああいう場面を見ていて、一層先  
生に好感を持つということがありますね。



▶ けがの手当て

「ゆいちゃんが来てくれてうれしい」

子どもとの信頼関係の成立の重要性について、これまで私は、教育的関わりの基盤となるものとしてとらえていたが、堀合先生との話し合いから、つながりたいと願っていた子どもが近づいてきてくれた、求めてきてくれたことが何よりもうれしいという保育者の素直な喜びの気持ちが大切であり、それがあるからこそ、信頼関係を築くということが、単なる保育技術論ではなく、子どもと深いところにつながり、変容へ導く原動力になり得ていくことに気付いた。

#### ◇生活の中で丁寧に関わる

H はるちゃんだけは、上履きを部屋で脱ぐと靴箱の中に入れておくようにしているんです。他の子には、自分で持って行きなさいと言うのに、はるちゃんだけには、言えない雰囲気があるのです。「あ、戻って来た」と思うと、さっと私が上履きを取って、並べて待っているようにしています。あの人の

持っているよい面を十分に出すようにするために  
は、靴とは関係ないけれども、そういう、靴を並べ  
るとか、待っていてあげるといふような、精神的な  
ことを大事にしようと考えています。

この頃、靴下がぬれているのを、私が言う前に「ぬ  
れてる」とおしえてくれるようになりました。その  
ことがとてもうれしいのです。

あの人の、初め困ったことのように思えた、  
「ギャー」と声をあげるといふような態度の中にあ  
る自我の強さを、いい方向に出せるようにしていく  
には、ある程度、こちらが、ことばでは言わなくて  
も、行動でしっかりと気持ちを受けとめてあげるこ  
とだと思っています。

K 幼稚園というと、教育の場であり、保育所に比べ  
て生活の場という意味合いが薄くなっているような  
気がしていましたが、堀合先生が大切にされている  
ことは、幼稚園をまず生活の場としてとらえるとい

うことのように感じられます。

H 昔から、幼稚園は生活の場だったのに、いつの頃  
からか教育の場であることが重くなってきたよう  
です。

最近の子どもは、大人と同様に、生活が貧弱になっ  
てきているし、大人に言われて、やらせられている  
ことも多いように思います。「先生に甘えるんじや  
ないわよ」と言って送り出す親もいます。家庭でも  
自立を促す面が強くなりすぎているのかも知れませ  
んから、幼稚園ではその子なりの生活を受けとめて  
あげたいと思っています。

出来る、出来ないにとらわれすぎ、甘えるというこ  
とは、出来ないからやってもらうということ、よ  
くないことだと思われているのかもしれない。

K 幼稚園では、やってもらふことを通しての、精神  
的なつながりを大事にしたいということなのです  
ね。

靴を揃えることが、はるちゃんの理解力とは直接関係がないように思えるが、どこか根源的な部分でつながっているのではないか。子どもの毎日の生活を整え、気持ちよく暮らせるようにと心を砕く人がいること、そのことによって活動の基盤である生活が安定し、気持ちよくすごせることは、やはり、発達の原動力となっていくのではないだろうか。また、こうした行為から感じられる、先生のはるちゃんの育ちに対する祈りのようなものも、はるちゃんの心を共鳴させ、発達を支える要素となっていくのではないだろうか。

#### ◇自分を出せるような環境作りを

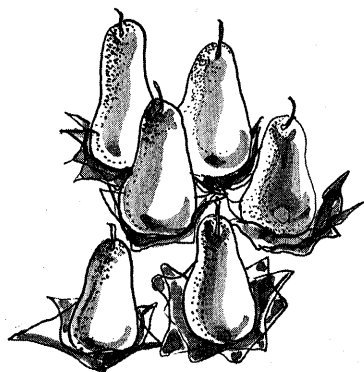
K そういえば、さおりちゃんが、あかりちゃんが今日お休みだというのを気にしていましたね。

H そうなんです。面白いですね。あかりちゃん、は、ロッカーに入っていることが多かったけれど、さおりちゃんという友だちができてから、少しずつ

動き始めました。

K どういうきっかけで？

H きっかけは分からないけれど……。  
どういうんでしょうね、ああいうものなんですよ





ね。「これだ」っていう大きなエピソードのない方が自然というか、本物のように思います。ただし、そこに至るまでの雰囲気というか環境というかがあって、自分を出すようになる。自分を出すことで、思いがけぬ人と人がくっついたりします。

K たまたま、非常に目だつエピソードに出会うと、「これだ!」と思って因果関係を解釈しようとするけれど、そうではないんですね。

H 因果関係など、はっきりしないのが子どもの世界、何もしなくても変わっていくのが本当。初めは、何とかしてくっつけようとしていたけれど、いくらそういう援助をしても、自分はこうだという頑として動かない。だから、直接的な関わりじゃなくて、環境に対して配慮をするよう考えています。

環境構成というのは、一人ひとりの子どもの自分らしさが出てきやすいような環境を考えるとということ、遊具をここに置くというような、目に見える物

的環境とは違います。そこが保育で一番大事なところだと思っています。

「あら、いつのまに」というのは、きつときっかけはあったのですが、それは言葉にならないさやかな出来事の積み重ねだと思うのです。

T 例えば、一緒に帰ったなどというのが、遠因になるかも知れないが、それが、直接の近因ではないというような……。

確かにお互いの微妙な影響力があるし、それらを整理して他者に伝えることは非常に難しいことですね。ただ、堀合先生の、根源的な、こういう風に子どもとの関係があつていいという思いが存在し、それが、何らかの形で影響しているのではないかと思うのですが。

K 保育者の願いということですか？

T 下手をすると、器用な先生は、その場その場への対応は見事になさるが、根源的なものの押さえがな

いことがある。堀合先生は、うまく言えないとおっしゃるけれど、その根っこのようなものがあるような気がします。そのうまく言えないという部分が大事なところではないのでしょうか。

K 保育者の願いが、環境ということで非常に子どもに対して効いてくるとは思いますが、幼稚園は集団の場であり、環境という意味では、他の子どもたちから受けるものも大きいように思います。

今日砂場での遊びを見ていて、保育者だけでなく、集団の持つ力ということも強く感じました。子どもたちが互いに環境になるということです。

H ですから、自分のクラスだけ見ているのでは保育者としては不十分だと思うのです。子どもたちは、大きい組を見ているし、その影響はうんと大きいですから。大人の私たちどころじゃないですから。だから、保育者が同じ願いを持って動くことで、幼稚園全体が落ちついてくるのだと思います。園の方針

というのは、何か大きな方針があるというより、一人ひとりの保育者が、園全体のことを考えて動いていることから生み出されるのではないのでしょうか。

一人ひとりの子どもが自分らしさを表せるような環境構成とは、と考えると、保育者が、その子がどのように育って欲しいと考えているのかという、保育者自身の保育観、発達観、人間観というもの存在にぶつかる。その部分を、保育者自らが問うことなくされる保育は、目に見える行為に対して、その場その場で対処していくようなものとなってしまっているのではない。子どもの心のより深いところに対応しようとする時、保育者には、自分自身を見つめ直すことが求められるのかも知れない。

(十文字学園女子短期大学幼児教育学科)

# Y夫の袋づめ

吉岡 晶子

幼稚園という新しい環境に入った時、子どもたちはそれぞれの気持ちをいろいろな姿で表す。あちこち動きまわる子、不安でジーンッとしてゐる子、不安な気持ちを泣いて表す子、教師のそばにすることで安心してゐられる子、何かを支えにすごす子など様々である。



そんな中で、Y夫は入園当初は私のそばにいたり、じっと周囲の様子を見たりして静かに不安に耐えている言葉の少ないおとなしい子であった。入園してしばらくたった頃から、Y夫は登園すると「先生、袋ちようだい」と来るようになった。紙袋だったりビニール袋だったりするが、袋を手渡すと、小

さい積木やおもちゃに小さい汽車をいくつか中に入れて袋の口をセロファンテープでしっかりとめるのである。そしてまた「袋ちようだい」ともらいに来て二重に袋づめにし、再び袋の口をセロファンテープでとめるのである。破れたところはセロファンテープでとめる。そしてその大切な袋を持って私と一緒に動いていた。時にはその袋を持って大好きな自動車に乗ったり電車ごっこをすることもあった。人形を心の支えにしたり、絵本を心の支えにしている子どもたちもいるが、Y夫の二重の袋づめを見るとこちらもせつなくなってしまった。

Y夫はこの袋を家に持ち帰ったこともあり、母親の話ではその袋を家で箱に入れ、ガムテープで封をして枕許に置いて寝ることもあるという。この袋づめがY夫の気持ちを象

徴しているように思え、袋の中には何を入れているのだろうか、不安な気持ちを入れたのか、自分の大切なものを入れたのか、そういうY夫をどう支えてあげたらよいのだろうか、と悩みつつ、とにかく袋づめに付き合っていくことにした。

Y夫は袋を自分の引き出しにしまって、遊びはじめようになり、降園後にY夫の引き出しを見ると袋が入ったままになっていることもあった。でも、時には私の気持ちの中に「またか」という思いが出て「袋ちようだい」と言われてつい「袋はないかも知れない」とか「袋あったかしら」など言ってしまうこともあった。そうすると「小さくてもいいから」「どんな袋でもいいから」など言うのである。あせってはいけないと私自身に言い聞かせ、Y夫のやりたいようにしていっ

た。そんな日々がしばらく続いたのである。

Y夫はがまん強いし、友だちに強く自分の気持ちを主張することも少ない。大人の期待にこたえようとする姿も見られ、一生懸命すぎるような気がするのである。でもY夫自身もそうしている自分の方が自分で認められるようなのである。そのようなY夫が毎日せつせと袋につめていたのは一体何だったのだろうとつくづく思う。Y夫を見ると「そうじゃなくてもいいのよ」、と伝えなくなる。がまんしなくてもいい、泣いてもいい、めちゃくちゃしてもいいから無理しないで、と言いたくなる。でも、こちらがそういう思いを強く持ってしまうとY夫の気持ちは混乱するかも知れないし、また新しい期待にこたえ

ようとするのではないか、そう思い、Y夫の小さな変化を待ち、その時を大事にしていこうにした。

夏休み明け、二学期が始まりY夫はどうなるだろうかと心配していたが、やはり「袋ちょうだい」があったのである。何日か続いたある日、私の中に「もう大丈夫かも知れない」という思いがあり、「もうないの」と答えるとY夫は「うん」と頷いて遊びに行った。もしかしたらもう少し待っても良かったのかも知れない、早まった対応だったのかも知れない。今でも自信がないが、あの時Y夫と二人で「もう大丈夫ね」と頷き合った気がするのである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

# ある日の育児日記から

(33)

佐藤 和代

この夏、圭は、五メートルほど泳げるようになりました。水泳好きのお父さんにくつついて、毎週プールへ通っていた成果です。

夏のはじめ、保育園のおたより帳にこんなことが書いてありました。

「きょうからプールが始まりました。けいちゃんは、まっさきにとびこんで、もぐってみせてくれました。けいちゃんにできるなら、とMちゃんとTちゃんまでもぐれるようになりました」

なるほどね、と笑ってしまいました。圭は、私に似てニブイほう。たいていの遊びは、皆より遅

れてできるようになります。ジムに登るのも、ブランコも、三輪車もそうでした。ですから「けいちゃんにできるなら……」

というのには納得。泳ぐのなんて簡単、と皆に思わせるあたり、ニブイのも役に立つのですね。

そして私としては、スイミングクラブでも保育園でもなく、お父さんと遊んでいて泳げるようになったことが、何だかうれしいのです。何でも学校や各種スクールで教わるのがあたりまえのような時代ですから。

もっともお父さんは「足がつかないプールだろ、いやおうなく抱きついてくるのがうれしくてね」……と言っていたっけな。泳げないほうがよかった？



# ◇◇◇◇◇ 公教育は家庭教育に ◇◇◇◇◇ ◇◇◇◇◇ どこまで関与するか (5) ◇◇◇◇◇

## 本当の連携が 始まるためには…

田代 和美

難しいテーマを与えられたものだ。一体何を書いてよいのか分からない。どこまで関与するかと言われて、ここまでと線が引けるような類のものだとも思えない。

かたや幼稚園教育指導資料の「家庭との連携を図るために」を紐といてみると、幼稚園は幼児にとって、教師との信頼関係を基盤にしながら、遊びを中心として友達と楽しく集団生活を送る場であり、充実した集団生活を展開することにより、幼児は生涯にわたる心身の健やかな発達の基盤となる様々な力を培っていく。一方、家庭は家族から十分な愛情や思いやりを受けて安心して過ごせる心の基地であり、幼児は依存し安心して過ごせる家庭生活を通して、愛情や思いやりの大切さ、生活していく上で必要とされる基本的な生活習慣などを自然に身に付け、精神的にもまた生活習慣の上でも次第に自立へと向かっていく、という旨

が記されている。関与するというより、それぞれの役割の違いがここでは極めて明確に分けられている。

それぞれ役割が違うという明らかなことが、そしてその異なる役割のどちらもが重要であり、両方が車輪のようにうまく回っていくことが好ましいという明らかなことが、しかし今、大きな課題となっているのはなぜだろうか。子どもにとっては家庭も公教育もどちらも自分の生活であり、子どもを中心に考えればスムーズに事が運ぶように思われるのだが、大人という厄介な存在は、自分の身を守るために相手の領分を犯すということをあたかも子どものためというかのようにやっている。

幼稚園と保育園では、家庭との関係において、かなり趣を異にしているかもしれないが、ここでは保育園にお世話になってきた親の立場から、園

と家庭との連携について、自分の失敗から考えてみたい。

わが子が保育園に入園したのは二歳二か月の時であった。月齢も低く、身体も小さく、同じクラスの子どもにぶつかられるとふっ飛んでしまいそうだった。ひとつ下のクラスに入れたなら、その方がどんなによかったかと、四月で区切られる公教育の場を恨めしく思ったことを覚えている。

入園直後「靴を一人で履けないようなので、家で練習して下さい」と連絡ノートに書かれたことに始まり、あれこれひとりできないことを書かれるにつけ、保育園はきついなあと心配になり始めた。靴が嫌いで、園庭で素足で遊ぶことや、集団の流れになかなかのらずに自分の思いで動くわが子は、「マイペースだから……」という表現で語られることが多かった。私には、子どものやり

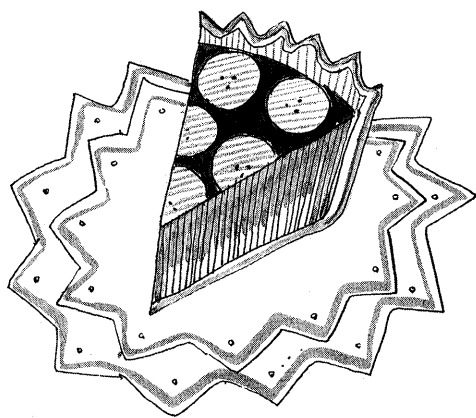


たいことが見ていて分かるだけに、そしてそのマ  
イペースさを大切に育てていきたいと思うから、  
なおのことその言葉が批判めいて聞こえて反感を  
覚えた。「お家と園との生活が余りに違うから……」  
「お家ではMちゃん中心に生活が動いている  
のはよく分かりますが、保育園というのはやはり  
集団だから……」と言われて、集団に馴染めな  
かったり、登園を渋ることの責任を家庭に帰され  
たように感じたこともあった。何で集団、集団と  
二言めにはいうのだろうか。集団が先になんかある  
わけがないと納得がいかない日々であった。保  
育参観の日がきて、みんなで一斉に与えられた製  
作やゲームをする保育にまたがっかりした。わが  
子は一斉に行う活動に加わらず見ていたり、周り  
の子どもたちがやることを見て、何をやっている  
のかが分かってようやくやり始めた頃にはもうお  
しまいになってしまっているということの連続

だった。二歳という年齢にはきつすぎると思われ  
るような集団での遊びが多い園の様子を見て、無  
理やりやらせられないことがせめてもの救いだと  
自分に言い聞かせていた。そんな中で園には頼れ  
ないという気持ちになりつつも、わが子のことを  
分かってもらいたいという一心で連絡ノートに家  
での様子をたくさん書いたり、担任と話をする  
機会を持つように努めていた。おそらく、なんて  
うるさい親だろうと思われていたに違いない。

お昼寝に関しては最も深刻であった。三歳児に  
なってから昼寝の嫌いなわが子は、今までに増し  
て登園を渋り出した。昼寝ができないことが常に  
連絡ノートの話題になり、私は「今日は、お昼寝  
できた?」と聞くことが日課のようになっていっ  
た。夜遅く帰宅することの多い不規則な母親の仕  
事に振り回されて夜型の生活になり、朝はどうし  
ても遅くなる。そのためにお昼ではまだ眠くな

い。それを常にどこか後ろめたく思っているから、「小学校に行ってからは、早く起きなくてはならないんだから、今のうちに早起きの習慣をつけておいたほうが……」などといわれると、なんで早起きがそんなに大切で、なんでお昼寝をすることがそんなに大切なのか、逆らいたくなる気持ちも起こった。それでもお昼寝ができるようにと、眠くてぐずるわが子を朝早く起こしたりもしたが、でもそれでも寝る様子はなく、相当寝不足の状態で、ようやく昼寝をするようになった。じゃあ、昼寝ができるためには、寝不足にしておけばよいのか……。これでは本末転倒である。子どもにとっての昼寝ではなく、昼寝をすることそのものが目的になってしまっているではないか。何をやっているのだろうか、と情けなくなった。でも、それもこれも保育園に何とかいやがらずに登園してほしいという気持ちからであった。



毎日毎日「今日、保育園お休み?」「あと何個いったらお休み?」と聞かれる日々だった。お昼寝以外はコレがいやというはつきりしたものはなかったのだが、「保育園ばかりじゃいやなんだ。」と毎日のように言っていた。朝、なかなか

私から離れられなかったり、クラスで散歩にいく準備をしているところに登園して「いやだ。今日はお散歩いきたくない。保育園にいる。」と頑として聞き入れなかったりする事もあった。担任の先生からすれば、子どもの行動は母親の帰宅が遅い日が多く、ゆっくり過ごす時間が足りないためとおそらくはそう思っていただろうし、本当のところそうだったのかも知れない。でも私からすれば、クラスの中にゆっくり好きなことに取り組みするような雰囲気のを毎朝感じて、なんでわが子をここにおいて行かなければならないのかなどと思う気持ち振り払うようにして出勤したり、迎えに行った時にいつも所在なげにいるわが子を見て、さあこれから楽しく過ごそうねと心の中でそう語りかけたりしていた。

この頃の私は、担任の先生と何とか仲良くしたいと思いつつ、どこかに任せられないという思い

があった。朝、子どもが「おはようございませう」と叫んでも、背を向けてオルガンの練習をしていて子どもにも気づきもしなかったり、子どもの思いをしつかり受け止めてくれないと感じることが多かったために、本当のところでは担任の先生を信頼していたとはいえなかった。実際には担任ともよく話をしたし、担任とクラスの親たちの橋渡し役のような立場に立っていたにもかかわらず、である。でも子どもが先生を好きなんだからと言いつけたり、先生の生活の大変さを理解しようとしたりして、そんなところで何とか自分の不信任に言い訳をしつつ、自分をごまかしながらつきあってきたのかも知れない。相手を責めても何の解決にもならないのだが、ごまかしながらつきあっても何の解決にもならない。

おそらく担任の先生もそして私自身も自分に対してどこかこれじゃあいけないと思いつつも今

の状況を自分を変えないという線を崩さなかったのだと思う。担任の先生は保育指針の改訂もあって、今までやってきた保育形態や方針を変える必要を感じながら、それをするとな自分の生活が大変になると思って、それは変えずに、許容度を広げるあたりで妥協すると決めていたのだと思うし、私もそのころは夜遅くなる仕事を減らすことはできない、と自分を振り返る事なく、しかし相手に対してはもっとゆったりとした保育をして欲しいと思っていた。そんな中でいくら話をしたところで無駄だったのかも知れない。身辺自立や指示に従うことなどについての要求がきびしかったり、けんかを頭ごなしに叱ったりする辺りについて気になることが多かったのだが、そのような点に関しても「先々のことをいつも考えてしまうのは私の悪い癖ですが、でも来年四歳児クラス単数担任ということを考えると……」というよ

うに方針を変えるつもりのないことは分かっていた。それにしても公教育は、家庭教育にどこまで関与するのではなく、私の場合はその逆に、親という立場だけで園に行っていればよいものを、公教育の領分に随分と関与し過ぎてきたと反省する。何かを担当に相談されたりすると、自分の立場が不明瞭になって中途半端なかかわり方をしてしまっていた。親が保育の内容にまで関与するなんて、まさに不信感を表出していたようなものではないか。

四歳児クラスになって二、三日たった頃、新しい担任の先生は「お母さん、私たちすぐくためされてるのよ。どこまで甘えられるか、どこまでやったら怒られるかって。」とにこにこしながら私に言った。その直後、わが子はテーブルの上上がった。今までの二年間、やってはいけな

いと言われるようなことを園の中でしている姿を見たことがなかったので私はちょっと驚いた。先生はテーブルの上に乗ってはいけないことを伝えながらも、「高いところにのりたいんだよね」と子どもの気持ちを汲んでくれていた。でも、それまで園の中で叱られたことなど（おそらく）一度もなかったわが子は、ムッと怒りを露にして先生の手を振り払って逃げた。その態度にまた私は驚いた。自分が悪いのは当然分かっているのにもかかわらず、あんなにストリートに感情をむき出しにしたのを園の中で初めて見たからである。私と二人でしばらく過ごした後で子どもは先生の元に行った。謝っていたようだが、私のところに戻ってきたときにはにこにこして「先生がね、明日登れるところ作ってくれるっていった」と言っていた。そして翌日、先生はその約束を守ってくれた。連絡ノートには「昨日はMちゃんの違う面が

見られてよかったと思います。子どもだって、おりこうばっかりやっていられせんよね。」と書いてあった。先生と子どもの距離は一気に縮まり、それは私にとっても同じであった。これはMが、園の中でも自分を出せると実感した初めての



出来事だったように思う。そして私が、園の中でわが子の内面に気づいてもらえたと実感できた初めての出來事だったように思う。

今、わが子は毎日喜んで保育園にいつている。

行きたくない気持ちから「なんだかお腹が痛いみたい」と毎朝言っていたあの頃が嘘のようである。このところ、夜、布団を蹴飛ばして何も掛けずに寝ているために寝冷え気味で、本当に朝お腹が痛かったりするのだが、それでも「いくんだもん。先生とお友達とあそびたい」と言う。何日か家をあけて戻ってくると、まず「保育園いつてみよう。誰かいるかもしれない。」と言って保育園に直行する。そんな姿を見ると、保育園楽しいんだな……とこちらも安心する。保育園が楽しいと思ってくれることで、自分がこんなにも安心していられるなんて今まで思わなかった。昼寝をしているかどうか、別に全体として睡眠が足り

ていて、元気でいればいいやと思えるようになって、担任の先生もお昼寝がいやだと言っている子どもが多いので「眠らなくてもいいから、静かに横になっていようね」といつてくれていることも知り、それでまた安心した。

一つのことがかうまく回り始めると、ほかのこととも相乗的にうまく回るようになる。問題は、その現象だけにとらわれればとられるほど、解決から遠ざかることを分かっている、自分やわが子がかかわる問題に関しては、なかなか解決の糸口が探せなかった。うまく回り始めたのは、何といても担任の先生への信頼からである。親にとっては、園での生活は把握しきれものではない。登園するときの子どもの様子や言葉だけでなく身体中で表現している楽しさから園の様子を把握している。その姿が担任への信頼につながる。また連絡ノートの言葉から感じられる暖かさのよ

うなものも信頼に関係していると思う。

公教育が家庭教育に関与するとしたら、わが家の場合は親に安心感を与えてくれていることだろう。私の把握できない、知らない時間を過ごしているわが子が、でもその時間を楽しく過ごしているという安心感。それがあって自分まで園に行くのにうきうきして、協力できることがあったらできる限りのことをしていきたいと思ってしまふ……。親って（私って）なんて単純なんだろうと我ながら呆れるが、正直にそう思う。もちろんこの協力は、保育の中身に関与するなどということではない。子どもたちといろいろな植物の栽培をやってみたいので、家で余っている種などがあつたら持ってきてくださいというような事への協力や廃物を常に貯めておいて持つて行くというような類の事である。

担任を信頼できると実感してから、私自身、本

当に気持ちが悪くなった。いろいろなことを自分で抱え込んで、他人の領分まで自分で何とかしようと思つていたような気負いがなくなった。私にはできないけれど、友達や園の生活の中で初めて経験できることがたくさんある。それをひしひしと感じるようになった。これが私の親としての自立の第一歩なのかもしれない。自分の領分、親としてできることの限界に気づき始めたときに、園に頼る部分が見えてきた。お互いを尊重するということ、相手を信頼できて、そして自分にできることの限界を知って、自分のなすべきことをしっかり果たしていくことなのだろう。これからようやく本当の連携が始まる予感がしている。

（お茶の水女子大学）

子どもたち間で、プロミスリングとい

うものがはやってる。高校生には何年も前から流行していたが、サッカー・Jリーグの開幕以来、人気の選手にあやかって小学生の間にも広まってきた。このリングは多色の糸で編んだ幅1cm程のきれいな紐で、願いごとをして手首に結ぶ。それが切れると願いが叶うということである。途中ではずすと効力がなくなるというので、一日中、お風呂に入る時もはずさないというのが原則らしい。昔から、子どもの遊びには流行があり過剰に熱中しすぎると、学校から「禁止令」がでる。ペーゴマ、メンコ、カード集め…。今、プロミスリングがその状態にある。学校のブル指導が始まる時期に、急にそのことが問題とされてきた。着けたままブルに入るということが、不衛生ということらしい。しかし、不衛生ということは何も学校のブルに入る時だけでなく、初めからわかっていたことである。いかにもお役所的な問題のと

り上げ方であった。

禁止のきっかけは、先生の注意に、子ども達が耳を傾けなかったということなのであろう。何故、そこが話し合えなかったのか。カッコイイからしているという子は、はずすことにそれほど抵抗はない。しかし「願かけ」をしている子（特に高学年の女の子）にとっては、そう簡単にははずせない。本気で信じているし、又信じたいと思っている。先生方も子どもの気持ちは大切にしてあげたいという所で、強くは言えなかったようだ。占いや怪談、心霊現象の大好きな現代の子どもの達のはやらせそうな「心」の遊びである。しかし、おまじないはおまじないでしかないということを、学校側はもう少し理性を持って、科学的にとり上げてほしい。気持ちの問題は又、別のことであろう。いみじくもこの小学校の教育の目標は「よく考える子」。自分の頭でよく考え、判断できる子を育てようという目標なのだと思うのだが…。(K)

## 幼児の教育

第九十二巻 第九号  
(一九九三年九月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成五年九月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二一一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五一二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

東京都文京区本駒込六一四一九

振替口座 東京九一一九六四〇

電話〇三―五三九五―六六〇四

●本誌御購読の御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございますたら、おとりかえいたします。



新幼稚園教育要領にそって子どもたちの遊びを見直した、  
保育実技の実践例をイラストで紹介するシリーズ。

## 遊びが育つ保育実技

子どもの遊びを育てるために、年齢差や発達に合わせた援助ができるように展開例を具体的に紹介してあります。



### ①9 きりがみ・おりがみ 手づくりおもちゃアイデア集

一枚の紙を折ったり切ったりはったりして作る動く手づくりおもちゃの作り方と遊び方を紹介したものです。折り紙がモモンガや凧になって空をとび、はがきがとうぎゅうやりきしになって地面を動きまわる。作る楽しさの他に遊びに使って二重に楽しめるそんなおもちゃのアイデア集です。

水野政雄・著

B5判 120頁 定価2,100円(税込)

### ②0 友達関係が広がる みんなで遊ぶ てぶくろ人形 テーブルシアター

人形は子どもの大好きな遊具です。身近なてぶくろを使って簡単に作れるぬいぐるみ人形の作り方と遊び方脚本集です。三匹のやぎなど童話のキャラクターが声と一緒に動く人形劇は子どもを夢中にさせます。ことばの発達やイメージを豊かにする保育に活用できます。



長縄泰子 石原ひとみ・共著

B5判 120頁 定価2,100円(税込)

### ②1 人間関係が育つ カード・プレゼント・ラッピング アイデア集

心を伝えるカード作りの工夫が、あなたをカード作りの達人に

誕生日カード、年賀状、クリスマスカード、暑中お見舞いカード、園行事のお知らせカードなど気持ちを伝えるカードの作品例と作り方図説集。行事に合わせた形のカードをはじめ、とび出すカード、もらったカードで遊べるカードなど喜んでもらえるカード作り

のアイデア集。材料選びの目や、喜ばせるコツが分かり、遊びを育てる保育資料としてお役に立ちます。

黒須和清・著

B5変型判 120頁 2,100円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。



ドキドキ、ワクワク、大好評の  
エプロンシアターに新シリーズ登場。

ポケットからステキな物語

中谷真弓先生の

# エプロン シアター2

エプロンシアター2は、「おりようりしまししょう」「北風と太陽」「はらぺこかいじゅう」の3点がセットになり、解説ビデオ付なので初めての先生でも、すぐ演じられます。

おりようりしまししょう

北風と太陽

はらぺこかいじゅう



キルティングのエプロンにプリントとアップリケ(フェルト)  
人形：フェルト他  
(セット内容)エプロンシアター 3点  
解説ビデオ(VHS20分)脚本付

解説ビデオ付・脚本付

33,500円(税込)

拍手がっさい、アンコール  
先生のお話がいちばん好き。

# エプロンシアター

赤ずきん

誕生日おめでとう

アンパンマンとばいきんまん

エプロンシアターは、「赤ずきん」「誕生日おめでとう」「アンパンマンとばいきんまん」の3点セットで、実演ビデオ付きです。

実演ビデオ・脚本付

33,500円(税込)



名作童話の世界があなたの保育技術と演技力アップで子どもの心によみがえる――

いきいき保育資料①

いきいき保育資料②

いきいき保育資料③

ザ・エプロンシアター①

ザ・エプロンシアター②

ザ・エプロンシアター③

中谷真弓・著

AB判・80頁・各定価2,500円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの  
**フレーベル館**